

らいいプラス

もうすぐインフルエンザが流行する季節がやってくる。昨年広まった新型インフルエンザに加え、今年は季節性インフルエンザの流行も予想されている。1日からはワクチンの接種が始まった。新しい抗ウイルス薬も増え、治療の選択肢も広がった。今シーズンのインフルエンザ対策をまとめた。

10月上旬、大川こども&内科クリニック(東京・大田)の待合室は大勢の子どもらでにぎわった。ほとんどが予防接種を受ける親子だ。8歳の息子と11歳の娘と一緒に川崎市から来ていた父親は「毎年家族全員でインフルエンザの予防接種を受けている。安心する」と話す。

同クリニックではインフルエンザの予防接種の予約は毎日数千人入っており、週末になると1000人を超した日もあった。大川洋二院長は「去年と同じくらいで、例年の2倍くらいの方が来ている」と話す。

昨年は主に新型インフルエンザがはやったが、「今年も新型に加え海外ではA香港型も出ており、流行を懸念している」とけいゆう病院(横浜市)の菅合憲夫医師は語る。香港型は「何年も大きな流行がなく、免疫を持つ人が少ない。予防接種などの対策をとった方がよさそうだ。」

ワクチン 供給量は十分 1回で「新型」「季節性」予防

に「く」、もしかかったとしても重症になるのを防ぐ効果がある。1回の接種(13歳未満は2回)で、新型インフルエンザと季節性A香港型とB型インフルエンザの3種類のタイプを予防する3価ワクチンの接種が今年の主流だ。

中高生にも推奨

高齢者や乳幼児、糖尿病などの人は、かかったときに重症になることがあるので受けたい。子どもは学校などで感染する機会が多い。今年では中学生や高校生にも予防接種を受けてほしい(大川院長)。昨年の新型インフルエンザの流行時期には、小学生に比べて中高生は予防接種を受けた人が少なかった。さらに感染者も少なかった。で、免疫を持たない人が多いと考えられるからだ。

昨年は医療機関でワクチンが不足するなどの混乱があったが、今年は大丈夫だ。国内

重症者向けに点滴登場

治療薬

治療薬の特徴と比較

薬名	タミフル	リレンザ	ラビアクタ	イナビル
投与方法	経口投与	吸入	点滴	吸入
投与回数	1日2回 5日間投与	1日2回 5日間投与	1回で1週間効果	1回で1週間効果
特徴、注 意点	最も多く使われる。小児では異常行動の指摘も	幼児は吸引しにくいので多くは小学生以上で使用	重症患者に向いている。15歳以上が対象	幼児は吸引しにくいので多くは小学生以上で使用
販売時期	販売中	販売中	販売中(2010年1月から)	2010年10月19日から
メーカー	ロシュ	グラクソスミスクライン	塩野義製薬	第一三共

約5800万回分のワクチンを生産する予定で、接種の優先順位は誰でも受けられる。

昨年予防接種を受けた人も新たに接種を受けた方が多い。大阪市立大学の広田良夫教授らの調査によると、昨年新型インフルエンザのワクチンを接種した人のうち、予防に十分な免疫力がある人は4

インフル 今年の備え方

という。効果までに2週間

予防接種を受けるときは、住んでいる市町村などが国と契約をした医療機関で予約をとる。医療機関は市町村のホームページや役所に問い合わせればわかる。費用は市町村ごとに決まっており、1回目は3600円、2回は2550円が多い。また高齢者や小児、低所得者に対しては接種費用を補助している市町村もある。接種後約2週間で効果



インフルエンザの予防接種を受ける子ども(東京都大田区の大川こども&内科クリニック)

今年のインフルエンザの予防接種の特徴(厚生労働省の資料をもとに作成)

ワクチンの特徴	新型インフルエンザと季節性(A香港型とB型)に効果がある3価ワクチン
費用	市町村によって異なる(1回目は3600円、2回目は2550円が多い)
接種回数	13歳未満は2回、通常それ以外は1回
費用の助成	市町村によって異なるが高齢者や小児、所得の低い人などに対して実施
効果の持続期間	接種から2週間後から5カ月程度
受けた方がよい人	高齢者、乳幼児、糖尿病など基礎疾患がある人、妊婦
受けない方がよい人	発熱している、以前ひどい過敏反応を起こしたことがある
優先接種	去年のような優先順位はない

元 気 ナ ビ

今月内に発売されるイナビルは専用の器具を使い吸入するタイプで、リレンザと使い方が似ている。1回で1週間効果が続くが、幼児は吸引しにくいので、主に小学生以上が適用対象になるとみられる。(長倉克枝)

が出るので、流行が始まる前に打っておいた方がよさそう。インフルエンザにかかっても、早期に治療すればほとんどがよくなる。新型インフルエンザの流行では、日本は欧米などよりも重症者や死亡者が極端に少なかったが、早期に治療薬を使ったためと治療薬の効果を指摘する海外の研究論文が相次いでいる。タミフルなどの治療薬は発症してから48時間以内に投与すると効果的とされており、世界保健機関(WHO)のガイドラインでも推奨されている。日本ではほとんどの医療機関にかかれずすぐに治療を受けられる。

医学誌に掲載された論文によると、米国の入院患者の約75%が治療薬を投与されていたが発症後48時間以内に治療を受けたのは約3割で、死亡した患者の多くは9日目以降になってから治療薬を投与されていた。また、米カリフォルニア州の妊婦の入院患者を調べた研究では、48時間以内に治療薬を投与された患者と比べて、48時間以降の患者では、重症や死亡になる割合が4.3倍になっていた。

治療薬はこれまでタミフルとリレンザが主流だったが、今年に入り相次いで新薬が登場し、選択肢が広がった。1月に登場したラビアクタ